ジャカルタ日本人学校に赴任して…

山口市立湯田小学校　教頭　徳光　哲生
（平成 11 年度派遣　インドネシア　ジャカルタ日本人学校）

１．遠く、新しい記憶

平成 11 年度、「即派遣組」としてインドネシアのジャカルタ日本人学校に赴任して３年間を過ごした。帰国して早 20 年以上が経つ。

赴任時のことを思い返せば…、赴任する年の１月、「ジャカルタ日本人学校」に４月から赴任するかどうか、校長から意思確認を求められたと記憶している。不勉強ながら、そのときは、まだ、「ジャカルタ」がどこにあるのか、インドネシアがどのような国なのかさえ知らず、すぐに地図で確認したことを覚えている。今では、社会が大きく「グローバル化」し、インターネットやＳＮＳなどが飛躍的に発達し、Google マップや Google アースで世界中を「見る」ことができるが、当時の自分はまだそのような環境にはなかったのである。

同じ年の４月からの赴任に向け、筑波で研修したり、家族とともに予防接種に明け暮れたり、船便発送の荷物準備に追われたりしたのをおぼろげながらに覚えている。当時３歳半の息子と１歳を迎えたばかりの娘、そして妻とともに渡航。大きな期待と少しばかりの不安の中、赴任した初めての国「インドネシア」。

今、思い返せば、この３年間の海外生活は、自分の「国際感覚」を磨くかけがえのない日々だったように感じる。３年間で出会ったたくさんの日本人、インドネシアの人々、今でも時折思い出す古いようで新鮮な記憶の数々である。

２．現地での生活・現地での記憶

赴任してからの３年間。

自分自身は、日本人学校での学習指導等の日々。自分の赴任時代には、北は北海道から南は鹿児島までの教員が日本人学校に在籍していた。これらの先生方との教育実践も大いに勉強になった。

妻や子供たちは、「お手伝いさん」とのコミュニケーションに奮闘し、また、楽しみながら日々を過ごしていた。インドネシアでは、他の多くの東南アジアの国々に派遣されている日本人がそうであるように運転手（インドネシア語で「ソピル」）、お手伝いさん（インドネシア語で「プンバントゥ）を雇っての生活であった。この経験も、異文化理解や異国理解には大きく役立つ経験であった。また、息子と娘はあえて日本人学校の幼稚園には入れず、現地の幼稚園に通わせた（現地の幼稚園とはいえ、上流層の子息が通う英語・インドネシア語両方を使う幼稚園ではあったが）。この経験も息子と娘にとって幼

伝統的衣装と当時住んでいたアパートメント

いときに経験した「国際感覚」として今の残っているように思われる。また、妻は、いまだに私たちが暮らしている山口市に留学してくるインドネシア家族のサポートを率先して行うなど、楽しみを感じながら当時身に付けた語学力や経験を生かしている。

３．貴重な体験を生かして…

小学部３年１組の子どもたちと（2001 年）

海外での貴重な経験をさせていただいた３年間、本当に多くのことを肌で感じることができた日々であったと思う。そこから学んだこと、そしてこれからに生かしていきたいこと、そんなことをこの項では綴ってみたい。

自分が経験し財産になっているもの、それは、異文化の中でたくさんの人と触れあい、その国での暮らしを生で感じることができたことだろうと思う。インドネシアは言わずと知れた「イスラム教」の国である。しかし、皆がイスラム教というわけではない。国民の多くはイスラム教であるが、そのほかにも、中華系の人は仏教徒であり、また、多くのキリスト教信者の人もいる。バリ島などに住む人々は、そのほとんどがヒンズー教徒である。多民族・多宗教の人々が、おのおのを尊重し、暮らしている国であると認識している（自分と共に生活した運転手さんはイスラム教徒、お手伝いさんはキリスト教徒であった）。また、貧富の差が日常にあふれる世界でもあった。一部の大富豪やお金持ちの人々、そして着のみ着のままでも明るく幸福感を感じながら生活している人々。みな、とてもフレンドリーで、自分の知らない世界をたくさん見せてくれた人々である。大金持ちの人と知り合い、その生活ぶりに感嘆したり、裸足で、あばら屋のような家で楽しそうに生活する家族のもとを訪ねて、幸せな生き方って何なのだろうと考えさせられたり。そんな人たちが住む世界に身を置いていた経験は、なにがしかの世界観を自分に与えてくれたのではないだろうか。また、そのような中で暮らすことで自分が「日本人」であることへの誇りを感じるとともに、日本を正しく説明することの責任感なども感じていた。他人のアイデンティティを尊重すること、自分のアイデンティティをしっかりともつこと、これらの大切さを感じたのである。

これからの子どもたちが生きていく時代は「グローバル化」がますます進み、多くの外国人と出会い、共に生活する時代であろう。そのような社会を生きていく子どもを育てる立場の自分たちは、真の国際理解や国際教育とはどのようなものを意識していくべきであろうと思う。そのために、世界中で私と同じような経験をした教員が、自分たちが感じた国際感覚や人権感覚をもとに教育活動を行うことはとても有意義であろうと思う。

自分の経験を今一度思い返し、異文化理解や国際教育などについて考えさせられた。改めて日本人学校赴任という貴重な体験をさせていただいたことに感謝したい。